

## 保育内容表現授業における音楽表現の生成過程と実行機能について

### Musical Expression Generation Process and Executive Function in the Class of the Childcare Contents Expression

島川 香織 \*

Kaori SHIMAKAWA

#### 抄 録

本研究の目的は、保育士・幼稚園教諭を目指す学生を対象とした保育内容表現授業における音楽表現の生成過程と実行機能について明らかにすることである。検証の結果、音楽表現や身体表現の振り返りを通して、優位な行動や思考の抑制の有無、課題に対する柔軟な対処と情報の更新が認識された。

#### I はじめに

音楽表現とは、表現者が感じとった内容を、楽器等の媒体を介する場合を含めて、表現者自身の身体を使って、外界に表す活動である。筆者は、ピアノという楽器を通した音楽表現活動に携わってきた。そこでは、作曲家が創った作品において感じとった内容を、旋律・和声・リズム等音楽の諸要素について、実際の楽器の奏法を通して、どのようにそれらを組み合わせ、どのような音色としての色合いや、構成感をつけていくのか、試行錯誤としての練習を積むということが常であった。現在、筆者は、このような音楽表現の経験を経て、大学での保育士・幼稚園教諭養成課程で、「保育内容表現Ⅱ」という科目を担当し、将来、保育士・幼稚園教諭を目指す学生に、音楽を通した内容表現の授業に携わっている。

森口佑介(以下森口)によれば、保育園での自由時間に、ある子どもが、サッカーをして遊んでいたのだが、自由時間が終わって、サッカーをやめて片付けなければならなくなったとしても、3歳程度の子どもは、サッカーをするという行動を律することが難しく、サッカーをし続けてしまうという。ここで、幼い子どもは、「抑制機能」という自分を律する能力が備わっておらず、「したいこと」や「していること」を優先してしまい、「すべきこと」をするのに苦労している。<sup>1)</sup>

筆者は、「保育内容表現Ⅱ」授業において、音楽劇づくりの活動を取り入れてきた。森口は、前述した「抑制機能」の上位概念である「実行機能(executive function)」が、子どもの将来を占ううえで、極めて重要な能力であるとしている。<sup>2)</sup> 将来、子どもたちを支援・指導する学生が、音楽劇づくりの活動を通して音楽表現する際、森口が子どもたちの将来に向けて重要な能力であるとする「実行機能」が、行われているだろうか。また、そもそも、子どもたちにとって、「実行機能」や音

---

\* 関西国際大学教育学部 教育総合研究所学内研究員

楽表現活動はいかなるものなのだろうか。

このような問題意識を持ち、本研究では、子どもたちの将来に向けて「実行機能」は、どのような意味を持つのか。子どもたちの音楽表現活動の生成過程は、どのようなものなのか。養成課程で、音楽劇づくりの活動を行う学生にとって、それらが、どのように「保育内容表現（音楽）」の授業科目で取り入れられたのか検証を試みる。

## II 子どもにとっての「実行機能」

本章では、子どもにとっての「実行機能」の意味を探る。森口は、目標を達成するために、自分の欲求や考えをコントロールする能力を「実行機能」とし、この目標のために自分をコントロールする力は、頭の良さとは直接的に関係せず、認知的スキルとは異なる能力という意味で、「非認知スキル」と呼ばれているとしている。<sup>3)</sup> 森口は、「非認知スキル」が、OECDの報告書で、他者とうまくつきあう能力、自分の感情を管理する能力、目標を達成する能力、とされていることを示したうえで、小学校入学前の子どもを対象にした研究の多くで、目標を達成する能力、特に、「実行機能」が子どもの将来に与える影響が強いことが示されているとした。<sup>4)</sup> 森口は、「実行機能」がどのようなものであるかの要点として、「実行機能」は、目標を達成するために、自分の行いを抑えたり、切り替えたりする能力のことであり、社会生活に欠かせなく、「実行機能」が高いと、仕事ができたり、健康な生活が送れたりする可能性が高く、人間において、特に発達しているとした。<sup>5)</sup> そして、子ども期の「実行機能」は、大人になったときの経済状態や健康状態を予測することも示している。<sup>6)</sup>

このように、「非認知スキル」としての「実行機能」は、子どもたちの将来にとって、欠かせない能力であることがわかる。

森口は、「実行機能」の育て方として、音楽<sup>7)</sup>及び子どもとのやりとりにあたる部分での幼児教育・保育の質が、子どもの「実行機能」と関わるとしている。<sup>8)</sup> ここでは、音楽プログラムが幼児の思考の「実行機能」を向上させ、「実行機能」が、主体的に行動をコントロールする力であることから、子どもが音楽を楽しみ、他の子どもと一緒に取り組むことができるため、「実行機能」を鍛えるのに、音楽を通じた訓練は、非常に有望であるとされている。また、ごっこ遊びとして、劇をすることによって、友達内でルールを共有し、友達からの期待を理解する必要が生じ、これにより、自分の行動を否応なくコントロールする必要が出てきて、子どもたちの「実行機能」が高まるとしている。

次章では、このように、子どもの「実行機能」を鍛え、高めるとされる音楽訓練及び劇に関連すると思われる子どもの音楽表現について考察する。

### Ⅲ 子どもの音楽表現の生成過程

吉永早苗(以下吉永)は、「表現する」とは、感じたことや考えたことが主体にとってもつ内容を出することであるとした。<sup>9)</sup> そのうえで、子どもの自己表現は、きわめて直接的で素朴な形で行われることが多く、無藤隆が「芽生え部分」と呼んだ<sup>10)</sup>音楽表現としては未熟であり、著しく未分化な形態の「芽生え部分」を、「前音楽的表現」と称している。<sup>11)</sup>

吉永は、子どもの音楽表現について、このように既成の音楽を再現することのみを意味するものではなく、子どもの「前音楽的表現」が、子どもによって、意図的になされるものばかりではなく、無自覚に表れたとみなせるものもあり、それらの「表出」が意図的・自覚的な表現へと向かい連続的に変容していく過程こそ、幼児期の音楽的発達であるかもしれないことを示唆した。

これを踏まえ、「前音楽」を含めた音楽表現の生成過程について、吉永は、幼児期の音楽表現の生成過程は「感じる 気づく 感情を抱く」「考える 想像する イメージする」「表現 創造」の三つが循環を形成するとした。<sup>12)</sup> 吉永によれば、感じる営みは「気づいたり感情を抱いたり」することで、考える営みは「想像したりイメージしたり」することである。「感じる」営みは、その時点までに経験されてきたあらゆる種類の感性的インプットにより育まれ、「考える」営みを介して、感性的インプットを連想的に組み合わせようとする。こうした連想(「考える」ということ)から、音楽表現の具体的なイメージが生まれ出てくる。吉永は、このように、音楽における創造は、これらの内的過程を意味しており、そこになされる表現活動から、「感じる・考える」営みが生み出され、先に示した「感じる 気づく 感情を抱く」「考える 想像する イメージする」「表現 創造」の三つが循環を形成するのであるとした。これらのことから、子どもの音楽表現活動について、表現に至る前段階に無自覚に表れた「表出」を、保育者が気づくことの必要性と、そこから、子どもの意図的・自覚的な表現へと変容していく過程で、「感じる 気づく 感情を抱く」「考える 想像する イメージする」「表現 創造」という3つの循環が成されていることに、保育者が改めて気づくことが、教育現場において大変大切なことであるといえる。

### Ⅳ 音楽劇づくりにおける実行機能の3要素

森口は、「抑制機能」について、その上位概念である「実行機能(executive function)」が、「高次の認知的制御および行動制御に必要とされる能力であり、目標志向的行動や注意制御、行動の組織化などに関わる多次元的概念である(Burgess1997;Duncan, 1986)」を示し、「実行機能」とは、目標到達のために意識的に行動を制御する能力であるとしている。<sup>13)</sup> そして、「実行機能」が「抑制機能(inhibition)」「シフティング(shifting)」「アップデATING(updating)・ワーキングメモリー」の3要素から成立し、高次の認知的制御において特に重要であると示した(実行機能の複合体モデルMiyake et al., 2000)。<sup>14)</sup> 森口によれば、「抑制機能」とは、当該の状況で優位な行動や思考を抑制する能力のことであり、「シフティング」とは、課題を柔軟に切り替える能力であり、「アップデATING」とは、ワーキングメモリに保持されている情報を監視し、更新する能力である。

それでは、音楽劇づくりの活動を行う学生にとって、「実行機能」がどのような意味をもつのか。音楽劇づくりの具体的方法は様々なので、筆者の「保育内容表現Ⅱ」の授業実践の内容に照らし合わせ、「実行機能」の3要素である「抑制機能」「シフティング」「アップデーティング」のそれぞれにおいて、音楽劇づくりの活動の具体が、どのように想定されうるのか、考察する。ここでは、音楽表現としての音楽劇づくりについて取り上げるので、音楽劇づくりにおいて、ストーリー(劇のあらすじ)を創作する場合については、取り上げないこととする。

前述したように、「抑制機能」とは、当該の状況で優位な行動や思考を抑制する能力のことである。音楽劇づくりの活動では、劇のストーリー展開の中で、歌のパートを作る際、一から言葉を通して作曲する場合や、筆者の授業実践のように、童謡歌集からすでに作曲されている歌唱曲に替え歌として、言葉を作る場合においても、劇のストーリーの内容から、その場面の印象に残った言葉で、歌詞を作ることになるであろう。このとき、この「その場面の印象に残った言葉で歌詞を作ること」が、優位な行動や思考と結びついていると考えられるが、そこで、例えば、歌詞の言葉が、ストーリーの場面には、ふさわしくても、メロディー(旋律)の拍子感や、音符の数と、語調や語呂が合わない場合、このストーリー展開からくる一番想像しやすくわかりやすい言葉が、当該の状況で優位な行動や思考から出てきたものであったとしても、これらの行動や思考を抑制し、別な言葉を選択することになるのではないかと。例えば、実際にストーリーにその場面に登場していなくとも、語り手があたかも、その場面を見ていて、主人公を応援するようなメッセージとしての言葉を作ったり、ストーリーの今後の展開を予期させるような言葉や、主人公の心境を思いやって表す言葉を作るなどである。

同様に、筆者の授業実践では、替え歌の歌詞づくりと同時並行的に、歌を歌いながら、身体表現も作って実演するとしているので、表現者が、ストーリー展開の中で、当該の状況で優位な行動や思考から一番動きやすい動きを作るとしても、実践の場である教室環境や、実演する人数との空間的配慮から、最初に優位であると思われた身体表現の動きを抑制することが考えられる。

次に、「シフティング」とは、課題を柔軟に切り替える能力のことである。音楽劇づくりの活動において、歌を作曲する場合でも、替え歌としての既成の歌唱曲を選択する場合においても、また、替え歌の歌詞を作る場合においても、元々のストーリーの中で、それらを実際に歌ってみたら、全体の流れにそぐわなかったので、変更するということが考えられる。身体表現も、全く同様で、実際に動いてみたら、動きがわざとらしく感じられたとか、逆に、おとなしすぎて、アピールできないなど、観客の立場にたってあらためて捉え直すということが考えられる。

次に、「アップデーティング」とは、ワーキングメモリに保持されている情報を監視し、更新する能力のことである。音楽劇づくりの一連の活動において、自分たちの音楽劇づくりを完成させるという目標があり、そこでは、グループ内で、当然いろいろな意見が出されるであろう。その中から、皆の意見を集約・統合しながら、現実的に可能な音楽劇を作っていくのであるから、常に、今まで出た意見や活動が、ワーキングメモリとして保存・記憶されていて、必要に応じて、それらを基に、実践が更新されていくと考えられる。

## V 実践方法

本章では、音楽劇づくりの授業における実践方法を示す。

授業実践は、R.2年5月から7月にかけて、関西国際大学教育学部教育福祉学科・基幹科目「保育内容表現Ⅱ」3クラス（86名）の学生を対象とし、方法は、打楽器（大太鼓・小太鼓・鉄琴・木琴・小物楽器）グランドピアノ1台、電子ピアノをひとり一台ずつ使用した対面授業と、手作り楽器や、自宅にあった楽器を使用した zoom による遠隔授業である。対面授業参加者は22名、遠隔授業参加者は、64名であった。

今回の授業では、『三匹のやぎのガラガラドン』を教材とし取り上げ、1グループ3～5人のグループ編成を行った。音楽劇づくりの具体的な活動に入る前に、以下①～④を確認した。①音楽劇づくりは、公共の場での発表ではなく、演習発表であり、ひとりが複数の役を担当する。②教育現場の音楽劇の発表での先生役とこども役の両方をする。③ナレーション、セリフ、ピアノ、歌、身体表現（zoom参加者は手遊び）、音表現の内容で台本をつくる。④音楽表現は、ピアノ＋歌＋身体表現、音表現は楽器による自由表現を行う。

具体的な音楽劇づくりのプロセスは、まず、各グループごとにお話を読み上げる語り手・登場人物のセリフ・音楽表現・音表現の役割を話し合いで決定した。語り手や登場人物役が読み上げるお話の内容は、本授業が音楽を通した内容表現の授業であることから、言葉の創作は行わず、すべてのグループが同じナレーションとセリフを用いた<sup>15)</sup>。次に、各グループで台本づくりに移行し、台本作成を行った。

音楽表現としての歌＋身体表現＋ピアノは、替え歌の元歌となる楽譜集を教師が指定し<sup>16)</sup>、元歌のセリフを変化させ、お話の場面に合うよう替え歌を創作し、歌＋身体表現＋ピアノの役割分担を決めて音楽劇の初め・途中・最後（計3回）に同時演奏することを台本に明記した。

音表現は、音による即興表現で、zoom参加者では、手作り楽器や家にある楽器、対面授業参加者では、教室内にある楽器を使用し、任意の楽器での即興表現を最低3回以上挿入する箇所を台本に明記した。

## VI 保育内容表現授業における音楽表現の生成過程と実行機能

ここでは、記述が端的であった学生Aの記述した活動全体に対する振り返り個人ワークシートの記述を取り上げ、音楽表現の生成過程である ①感じる 気づく 感情を抱く ②考える 想像する イメージする ③表現 創造 及び 実行機能の3要素である ④抑制機能 ⑤シフティング ⑥アップデーティング の視点から分析を試みる。尚、実行機能の3要素については、学生Aの記述が、3要素に関連する場合のみ、分析を試みる。

以下、1. から 8. は、ワークシートの質問項目である。

## 1. 音楽表現をなぜそこに挿入しましたか？

(1回目) ①始まる合図として前に注目し何が始まるのかわくわくしてほしかったから。

(2回目) ②1番の盛り上がりであり③今から戦うぞ！という表現がしたかったから。

(3回目) ②③最後に3匹で仲良く草を食べる場面を表現がしたかったから。

### (分析)

音楽表現の生成過程では、劇の始まり、中盤、終盤の気づきによるわくわく感、盛り上がり、仲の良さのイメージと表現が認識された。

## 2. 音楽表現を挿入してみて、ストーリーの中でどのようなことに気づいたり、感じたりしましたか？

(1回目) ①最初に「ご飯を探すよ」と言ってしまったたり、「ヤギの旅」と言っているのが、ネタバレになってしまった。②④⑤⑥前を見てほしい場合は、今からお話始めるよ！どんなお話かな！などの歌詞のほうが良かったと思った。

(2回目) ②③⑤⑥もっと低い声で怖い感じを表現したかった。手遊びも、襲ってやる！というくらい迫力があってもよかったかなと思う。

(3回目) ③④コロナの影響で手を繋ぐことはできないが、もっと寄り添って仲良くしたいと思った。

### (分析)

音楽表現の生成過程では、観客の立場の気づきによる期待感の想定、恐怖や迫力感のイメージの表現と手法が認識された。

「今からお話始めるよ！どんなお話かな！などの歌詞のほうが良かった」と、後からの振り返りを通して、この状況での優位な行動として「最初に『ご飯を探すよ』と言ってしまったたり、『ヤギの旅』と言っている」ことを選択したことが、ネタバレにつながると気づき、学生自身の抑制機能を働かせなかったことが、認識された。また、最初のアイディアではなく、次のアイディアに、シフティングするべきであったということが、ワーキングメモリに保持されている情報の更新としてのアップデートングがなされた。

「もっと低い声で怖い感じを表現したかった。手遊びも、襲ってやる！というくらい迫力があってもよかったかな」と、振り返りを通して、別のアイディアに、シフティングするべきであったということが、ワーキングメモリに保持されている情報の更新としてのアップデートングとともになされた。

「コロナの影響で手を繋ぐことはできないが、もっと寄り添って仲良くしたいと思った」と、当該

の状況で優位な行動や思考について、抑制機能が働いた。

### 3. 音楽表現の替え歌は、どのように選択しましたか？

①②「やぎ」や「怪物」など、物語に関連した曲を選択した。そのほうが雰囲気も伝わりやすいと思ったからだ。最初の曲は有名な曲にし、高揚感を持ってもらえるよう工夫した。

③歌詞については、語呂を考えながら、楽しい歌詞をつけるよう工夫した。

(分析)

音楽表現の生成過程では、物語の内容や雰囲気の伝達性への気づき、観客の感情の想定、楽しい表現としての創作が認識された。

### 4. 音楽表現で身体表現(リトミック)はどのように創作しましたか？

①②③真似しやすいものにした。全身で表現することで、旅に出ている感じや、怪物が強い感じを表現することを心掛けた。⑤考えるのが難しかったため実際に自分が動いて意見交換を行った。

(分析)

音楽表現の生成過程では、模倣しやすさの気づき、表現手法のやり方、物語の場面やキャラクターのイメージが認識された。

「考えるのが難しかったため、実際に自分が動いて意見交換を行った」と、課題に柔軟に対処するシフティングがなされた。

### 5. 身体表現(リトミック)の動きは、実際に動いてみて、音楽の構成や流れ・曲想とどのように関わっていましたか？

②③実際に動きながら劇をすることで、分かりやすく表現することができた。⑤⑥ただ、前にいる人が左右バラバラだと観にくく、統一感が出ないため、動きを統一するだけでなく、どちらから動き始めるかを話し合う必要があると考える。

(分析)

音楽表現の生成過程では、観客の立場からの劇の視覚的イメージの想定に伴う表現手法と過程が認

識された。

振り返りを通して「前にいる人左右バラバラだと観にくく、統一感が出ないため、動きを統一するだけでなく、どっちから動き始めるかを話し合う必要がある」と、統一感という新しい視点から、別のアイディアに、シフティングするべきであったということが、ワーキングメモリに保持されている情報の更新としてのアップデATINGとともになされた。

#### 6. 音表現はどのように挿入する所を選びましたか？

①②③足音のところに楽器を使い、インパクトに残る部分（こらー！、ドシーン、うぎゃー！）の部分にずっしりとした音を入れた。この部分は、セリフを言ってから音を入れることで、セリフを聞こえやすくした。魔物がさっさといけ！と言った後、やぎは逃げるように橋を渡ったと思ったため、木琴を入れた。

（分析）

音楽表現の生成過程では、各場面のインパクトやキャラクターの心境の気づきを通して、セリフや動作のイメージに伴う効果音等の表現手法が認識された。

#### 7. 音表現の楽器や音色は、実際に演奏してみてどのように感じましたか？

①②③単音でも十分表現できるが、音を組み合わせることで重厚感が生まれた。また、足音からヤギの体格を想像出来たり、魔物の恐ろしさを表現できるため、物語を分かりやすく伝えることができる。クライマックスの部分に音を重ねることでより盛り上がることができ、音があることで感情や表現を伝えやすくなる。

（分析）

音楽表現の生成過程では、音の組み合わせ等の気づきが、音やキャラクターのイメージにつながり、表現による演出的効果、感情や表現の観客への伝達性が認識された。

#### 8. 音表現や音楽表現は、言葉やストーリーとどのように関連していましたか？

①②③音は言葉や感情のような役割を持つ。そのため、セリフに音をつけることで言葉を理解するのが難しい子どもにも楽しめる物語になると思う。高揚感や緊迫感は、話など声だけでは表現するのは難しい。音を入れることで飽きずに楽しみながら物語に入り込むことができる。音と言



葉の組み合わせは無限にあり、無限の可能性があると考える

(分析)

音楽表現の生成過程では、音の言葉や感情との関わりへの気づき、観客への伝わり方、物語への感情移入とその創造的可能性が認識された。

## Ⅶ 分析結果

学生 A の記述した音楽劇づくりの活動全体における①感じる 気づく 感情を抱く ②考える 想像する イメージする ③表現 創造 及び ④抑制機能 ⑤シフティング ⑥アップデートイングの分析結果は以下の通りであった。

音楽表現や音表現の挿入では、物語の構成内容、雰囲気の伝達性、模倣、インパクト、音の組み合わせ、音の言葉や感情との関わりへの気づきが為された。物語の場面、音、キャラクター、セリフや動作がイメージされ、観客の期待感や感情、劇の視覚的イメージの想定から、表現手法、表現による演出的効果、感情や表現の伝達性、感情移入と創造的可能性が認識された。

ストーリーにおける音楽表現、音楽表現における身体表現の創作、音楽の構成や流れ・曲想と関わる身体表現の振り返りを通して、活動時の記憶に、新たなアイディアや視点が付加され、課題への柔軟な取り組みとして切り替えの認識がなされた。また、活動に対する抑制機能が行使されるとともに、抑制機能の有無が認識された。

## Ⅷ 考察と今後の課題

今回の検証を通して、音楽表現や身体表現の振り返りを通して、優位な行動・思考の抑制の有無、課題に対する柔軟な対処と情報の更新が認識された。

このことから、音楽表現の生成の過程で、目標志向的行動や注意制御、行動の組織化などの実行機能が、事後の振り返りを通して意識化が促進され、明確な認識につながるのではないかと考えられる。

今後の課題として、音楽表現活動そのものへの認識と実行機能における認識を、どのようにに関連させ育成できるのか検証する必要がある。

## 引用文献

- 1) 『わたしを律するわたし 子どもの抑制機能の発達』(2018)森口佑介 京都大学学術出版会 p.2
- 2) 『自分をコントロールする力 非認知スキルの心理学』(2019)森口佑介(株)講談社 p.7
- 3) 同書 pp.4-5
- 4) 同書 p.45

- 5) 同書 pp.37-38
- 6) 同書 p.62
- 7) 同書 pp.182-184
- 8) 同書 pp.190-197
- 9) 『子どもの音感受の世界—心の耳を育む音感受教育による保育内容「表現」の探究—』(2016)  
無藤隆監修 吉永早苗著(株)萌文書林 p.24
- 10) 無藤隆『幼児教育の原則—保育内容を徹底的に考える—』(2009)ミネルヴァ書房 p.113
- 11) 同掲書 9)p.24
- 12) 同掲書 9)pp.25-26
- 13) 同掲書 1) p.3
- 14) 同掲書 1) pp.6-7
- 15) 福娘童話集 きょうの世界昔話 12月15日より  
<http://hukumusume.com/douwa/pc/world/12/15.htm>
- 16) 『いろいろな伴奏で弾ける 選曲 こどものうた 100』(2020) 小林美実監修 (株)チャイルド  
本社

## Abstract

This study is a practice report about the musical expression generation process and executive function in the class of the childcare contents expression for students to be a childcare person, kindergarten teacher.

As the result, through looking back on musical expressions and physical expressions, it was recognized whether or not there was superior behavior / thinking suppression, also recognized flexible coping with tasks, and information updates.